

段玉裁と江沅及び江沅の親族

——江沅『説文解字音均表』研究のために——

白 田 真佐子

要旨

清代学者江沅（1767-1838）著了《说文解字音均表》十七卷。这是当时著名学者段玉裁（1735-1815）托付给江沅的。对研究《说文解字音均表》来说，要了解江沅的生平是需要的。首先本文要讨论江沅所写的段玉裁略传和朱绶所写的《江先生家传》。江苏吴县江氏家族的家谱恐怕没有编纂，所以通过别的材料我们可以知道江沅的家属和亲戚。江沅的祖父江声（1721-1799）很有名，江声在《尚书》上有很深的造诣，有关小学的著作以《六书说》为主。江沅继承了江家的学问和世代书香的门风。可惜江沅没有儿子，他弟弟江湘的孙子当江沅的后嗣继承了家学，后嗣有两位，即江元文和江文炜。本文还讨江沅的后嗣，因为江沅《说文解字音均表》稿本在上海图书馆，其跋文是江文炜所写的。不久将来，本人有效利用2016年发表的论文、2019年发表的和本文的结论对上海图书馆藏《说文解字音均表》稿本要进行研究。

关键词：清代；江沅；《说文解字音均表》；段玉裁；生平；家属；后嗣；江声；江元文；江文炜

1. はじめに

中国清代の学者・江沅による『説文解字音均表』を研究するために、段玉裁と江沅、江沅の略歴、江沅の親族について本稿では論じる。そもそも江沅は段玉裁から託されて『説文解字音均表』を著わした。本稿では江沅が記した段玉裁の略伝、朱绶「江先生家伝」に見える江沅の略伝の他、江沅が記した親族に関する文章も用い、江沅の跡継ぎにも言及することに

したい。江沅の略歴の他に、その親族まで含めるのは『説文解字音均表』上海図書館蔵本の江文煒跋に関わるからである。白田2016・2019と本稿の結果をもとに、将来的に『説文解字音均表』上海図書館蔵本の研究につなげていきたい。

2. 段玉裁と江沅

段玉裁、字は若庸、号は茂堂（または懋堂）、江蘇金壇の人。1735年（雍正13年）に生まれ、1815年（嘉慶20年）に逝去している。段氏の著作で、本稿と関連するのは『六書音均表』及び『説文解字注』である。段氏の生涯や著作については研究が進んでいて枚挙に暇がない。坂内2014（330-364頁）の「近現代説文学研究文献目録」には段玉裁の『説文解字注』に関する文献も多数含まれている。以下、必須とも言うべき文献を数点挙げてみることにする。

台湾の林慶勳氏は、林1979において、「第一章 段氏生平考」、「第二章 段氏交遊考」、「第三章 段氏著述考」、「第四章 段氏年表」として、段玉裁の生涯、交遊関係、著作、年表について合計203頁にわたって、詳細に述べている。大陸の鍾敬華氏が『経韻楼集』に句点を施した注釈書（段玉裁・鍾2008）に、劉盼遂「段玉裁先生年譜」も句読点付きで収められている。年譜についてはさらに詳細な王華宝2016も出ている。日本語文献としては、頼・説文会1983の「第二章 段玉裁の『説文解字注』」、「第四章 段玉裁の古音十七部説」を通して、段玉裁の『説文解字注』『六書音均表』について学ぶことができる。

次に江沅であるが、字は子蘭・伯蘭、号は鉄君、江蘇呉県の人である。1767年（乾隆32年）に生まれ、1838年（道光18年）に逝去している。江沅の略歴は後述するが、とりあえず『清史稿』（巻四百八十一、儒林二）によれば、金壇の段玉裁が蘇州に寄寓していた時、江沅はその門に数十年出入りしていたという（「金壇段玉裁僑居蘇州，沅出入其門者数十年。」）。

以下に、江沅が段玉裁について記したものを引用したい。江沅は「懷旧詩三十五首」（『染香齋詩録』下）を書いており、詩の前に略歴を記す。「段先生茂堂」という五言律詩の前にも、段玉裁の略歴ならびに自分との交流が記されている。また、江沅の祖父・江声（字は叔雲、江蘇呉県の人、1721-1799）と段玉裁との交流も垣間見ることができる¹⁾。

先生諱玉裁，江蘇金壇人。乾隆廿五年，挙於郷。官貴州玉屏県知県，又為四川巫山 県知県。

先生の諱は玉裁で、江蘇金壇の人である。乾隆廿五年（1760年）、郷試に合格した。貴州玉屏県知県に任用され（1770年）、また四川巫山県知県となった（1778年）。

以親老乞帰，僑寓呉中。与先大夫論小学甚契。時箸『説文解字注』未畢。先大夫既歿。

予懲怠其速成，且作書以策之，先生乃以子書置坐右自勵，不數載而書成。又速之刻不果，後要予董工。

親が老いたので帰郷を乞い（1780年）、吳中（蘇州）に寓居した（1792年）。先大夫（江声）と小学について論じて、よく交流していた。その時『説文解字注』はまだ完成していなかった。先大夫（江声）はすでに他界した（1799年）。私は急いで成し遂げるようにとお勧めして、お出紙も書いて励ましたところ、段先生は私の手紙を座右に置いて自らを励まし、数年経たないうちに書物が完成した（1807年）。また急いで刊行しようとしても果たせず、後に私に刊行の監督をしてほしかった。

予適有閩中之游，泊婦而先生已先一年卒矣。病中莊成刻本，喜甚深感念。予且悵不得復見也。時年已八十一矣。『周礼漢詁攷』、『毛詩古訓伝』、『尚書古文撰異』、『説文解字注』行於世。

私はちょうど閩中（福建）に行くことになり、帰ってみると段先生は前の年に亡くなっていた（1815年）。病にも関わらず、莊重に刊刻されたことは、喜びがとても深いと思う。さらに私はもう先生に会えないことを嘆いている。時に年はすでに八十一であった。『周礼漢詁攷』、『毛詩古訓伝』、『尚書古文撰異』、『説文解字注』が世の中に流布している。

江沅は段玉裁『説文解字注』に対して重要な役割を果たしており、段氏の『説文解字注』経韻楼本に王念孫の序（嘉慶十三年，1808）、江沅の後叙（嘉慶十九年，1814）、陳奥の跋（嘉慶二十年，1815）があり、陳氏の跋の直後に盧文弨『説文解字讀』序（乾隆五十一年，1786）がある。林慶勳1979（73-74頁，第二章段氏交遊考 四段氏弟子考 6 江沅）は、『漢学師承記』（巻二）、『清儒学案』（巻七十六）等を資料に、江沅について述べる。さらに、林1979（74頁）で指摘されているのは、1815年段玉裁が亡くなった後、江沅が1819年に三か月かけて、段玉裁『説文解字注』経韻楼本を読んで書入れをしたものを、台北の国家図書館が所蔵していることである。筆者も原本を閲覧した。さらに、段玉裁は江沅に『説文解字音均表』の編纂を委託し、序文にあたる『説文解字音均表』序を書いている。

江沅は一般的に段玉裁の弟子とみなされ、例えば林慶勳1979（73-74頁）でも、江沅は「段氏弟子考」に含まれている。筆者もそれを踏襲したいが、張舜徽氏が江沅は段玉裁の諍友であるとみなしていること（張2004，306頁）は、重要な指摘である。

3. 江沅の略歴とその資料

3.1 江沅の生没年

江沅の生没年（1767-1838）は姜・陶1961（648頁）と龔自珍（1792-1841，字璉人，浙江

仁和の人)『己亥雜詩』から分かる²⁾。なお、姜・陶1961の記述は簡単で、龔自珍『己亥雜詩』とは『己亥雜詩』附录「某生与友人書」中の詩の自注(『龔自珍全集』, 523頁)のことで、その自注は次の通りである。「江鉄君沅是予学仏学第一導師, 先予婦一年逝矣。」(江鉄君沅は私の仏学の最初の師であり、私より先に亡くなって一年になった。)また、江文煒「『説文解字音均表』跋」から江沅の生没年が分かることは陳鴻森2012(82頁)が指摘している。また、朱綬「江先生家伝」は次に取り上げるが、そこに道光辛卯(1831)六十五歳であったこと、卒年が七十二歳であることが見えるので、生没年の確定に役立つ。

3.2 朱綬「江先生家伝」と『蘇州府志』, 『碑伝集補』, 『清儒学案』

『江先生詩古文詞遺集』は江沅の文や詞を集めたものであるが、その巻首に朱綬「江先生家伝」があり、この伝記が江沅の略歴・親族等について適切に述べている。『江先生詩古文詞遺集』巻首では単に「伝」という題目であるが、朱綬『知止堂文集』(巻六)では「江先生家伝」となっている。この朱氏による伝記についてはダイジェストが『蘇州府志』(巻八十四, 人物十一, 呉県, 江沅)にあり、『碑伝集補』(巻四十, 経学二, 江沅)は『蘇州府志』から引用している。『清儒学案』の江沅伝(巻七十六, 良庭学案)も「參蘇州府志」と出典を記すが、江沅「『説文解字音均表』弁言」からも引用している。以下、朱綬「江先生家伝」のダイジェストとも言える『蘇州府志』の江沅伝を示すことにする。a, b, c, dは便宜上付けたものだが、dの末尾に朱綬「伝」と出典が示されている。

a. 江沅, 字子蘭, 声〈見元和〉孫, 優貢生。

江沅, 字は子蘭, 江声〈元和に見える〉の孫で, 優貢生。

b. 為文好窈渺之思。屢試於郷, 不得當, 而歳科試輒冠儕偶。

文を書くとき美しい感じがする。しばしば郷試を受けても合格しなかったが、歳試や科試は他の人の中で一番であった。

c. 平生最精『説文』, 金壇段玉裁作『説文解字注』, 多所商榷。嘗以『説文』五百四十部, 從段氏『音均表』十七部編之, 字為之注, 凡段氏之譌者加駁正焉。篆書自名一家。

平生は『説文』に最も詳しく、金壇の段玉裁が『説文解字注』を作った時、商榷したことが多かった。嘗て『説文』五百四十部を、段氏の『六書音均表』十七部によって編纂し、文字に注を記し、凡て段氏の誤っていることは駁正した。篆書には一家言があった。

d. 嘗從彭進士紹升游。得古文之法, 又工填詞。先後一遊閩粵, 余則里居教授時為多。卒年七十有二。朱綬「伝」

嘗て彭紹升進士に従い遊学した。古文の法を取得し、また填詞に巧みだった。一度閩

粵に赴いたが、その前後は郷里で教授していることが多かった。卒年は七十二歳。朱綬「伝」による。

aの部分の〈見元和〉は『蘇州府志』では双行の注となっていて、江声は卷九十（人物十七、元和県）に息子の江鏐とともに伝記がある。bの部分は朱綬の原文から抜き書きしていて、意味が通じにくい部分である。cの部分を読むと、江沅が段玉裁に対して、学説を反駁しているようだが、朱綬「江先生家伝」原文では「凡段氏之譌者加駁正焉。」の後に「段先生為之心服。」とあり、段玉裁が江沅に対して学問の上で信頼していたことが分かる。dに見える彭紹升については後述する。

dの部分の後、以下のように三名の名が挙がる。もともと朱綬「江先生家伝」にないが、『碑伝集補』でも引用されている。

与沅同時齊名有顧元熙，李福，祭雲。顧見長洲，蔡見元和。（以下省略）

江沅と同時期に名を馳せたのは、顧元熙，李福，祭雲である。顧元熙は（『蘇州府志』）長洲（卷八十九，人物十六，長洲県）に見え、蔡雲は元和（卷九十，人物十七，元和県）に見える。（以下省略）

「（以下省略）」とした部分には李福の略伝と、同時代の管英の略伝もある（『碑伝集補』では省略）。江沅は顧元熙，李福，祭雲と交流があった。江沅は「中憲大夫翰林院侍講顧君墓誌名」（『染香齋文集』上）を書いており、それによれば顧氏は道光元年（1821）九月，四十二歳で逝去している。江沅「顧君耕石」（「懷旧詩三十五首」，『染香齋詩録』下）の自序にも卒年が「四十二」³⁾とある。江沅「李君子仙」（「懷旧詩三十五首」）の自序に、李氏の「卒年五十三」とあるが、生没年は記されていない。蔡雲のために「借秋亭詩草」序（『染香齋文集』下）を江沅は書いている。江沅・顧元熙・李福・蔡雲の名前が一度出てくるのは江沅「汪先生稼門」（「懷旧詩三十五首」）の自序で、「独喜蔡君雲，李君福，顧君元熙及予之文。」（独り蔡雲君，李福君，顧元熙君及び私の文を喜んだ。）とある。江沅の詩文から見ても、『蘇州府志』の江沅伝に顧元熙，李福，祭雲への言及があるのは頷ける。

次に、朱綬「江先生家伝」では記されているが、『蘇州府志』では省略されている重要な点を補足しておきたい。それは江沅の仏教への帰依である⁴⁾。道光辛卯（1831），六十五歳の時，江沅は常州天寧寺で菩薩戒を受けた。つまり出家している。また，江沅の師には彭紹升（字は允初，江蘇長洲の人，1740-1796）がおり，これは朱綬「江先生家伝」に見える。顧承「江先生詩古文詞遺集」序（『江先生詩古文詞遺集』巻首）も江沅が彭紹升の弟子であることを言うが，段玉裁には言及していない。彭紹升は科挙に受かってもし官せず，学問を修め，仏教に造詣が深かった。彭氏一族は蘇州の名家である⁵⁾。江沅は彭紹升著『測海集』に跋文（『測海集』跋）を寄せる（『染香齋文集録』下）。

また，朱綬は「江先生家伝」で，江沅と段玉裁，江沅と彭紹升それぞれの交遊を記してい

る。江沅に息子がいなかったので、江沅の弟の孫・江元文が跡継ぎであったと朱綬は言うが、これは「5. 江沅の跡継ぎ」で述べたい。

なお、朱綬（字は仲環、江蘇元和の人、1789-1840）は「王君墓志」（『知止堂文集補遺』）も書いている。王君とは王嘉祿（字は井叔）であり、王芑孫（江蘇長洲の人、字は念豊、1755-1817）の三男で⁶⁾、1824年二十八歳で他界した。当時、朱綬と王嘉祿は「朱王」と呼ばれていたという（『清史列伝』巻七十三、文苑伝四、朱綬）。

3.3 江沅の弟子・親族による伝記に関する文章

江沅の弟子・陳奐（字は倬雲、江蘇長洲の人、1786-1863）による江沅の伝記としては、陳奐『師友淵源記』江沅の条がある。そこには、陳奐が江沅の弟子となった経緯、それから陳氏が段玉裁にも師事するようになったことが書かれている。江沅の条の末尾に「嗣孫文煒，字形甫，庠生。」とある。これは「5. 江沅の跡継ぎ」で述べる。陳奐『流翰仰瞻小伝』第一冊には八人の伝があり、冒頭の段玉裁に続いては江沅の伝が数行ある（陳奐・呉格262頁）。これは『師友淵源記』江沅の条の最初と最後の方とほぼ一致する⁷⁾。

江居士 師諱沅，字子蘭，一字鉄君。呉優貢。精篆楷，工帖括。又悦禅学，通积典。晩歳祝髮，法号祖庭。箸『説文解字音均表注』十七篇，又『入仏問答』二卷。

江居士 師は諱が沅，字は子蘭，鉄君という字もある。呉の優貢。篆書楷書に優れ，帖括が上手であった。また禅学を喜び，积典に通じていた。晩年出家し，法号は祖庭。『説文解字音均表注』十七篇，また『入仏問答』二卷を著わした。

なお、陳奐『流翰仰瞻』（陳碩甫友朋書札）には、江沅が陳奐に送った手紙も収録されている（陳奐・呉格177頁）。

江沅の弟子には雷浚（字は深之、江蘇呉県の人、1814-1893）もおり、「『説文解字音均表』跋」を書いている。これは白田2016（28-29頁）で第五段落まで訳注を試み、最後の第六段落は白田2019（60頁）で論じたので、本稿では繰り返さないことにする。

江沅の親族としては、跡継ぎの孫・江文煒が「『説文解字音均表』跋」（江沅『説文解字音均表』稿本、上海図書館蔵）を書いており、ここで江沅の略伝、『説文解字音均表』稿本について述べている。江文煒については本稿「5. 江沅の跡継ぎ」で述べる。

3.4 江沅の著作

ここで江沅の著作にも言及したいが、本稿の目的は『説文解字音均表』研究のためであり、『説文解字音均表』に関わるテキスト等は筆者が別に研究している（白田2016・2019等）。ここでは朱綬「江先生家伝」に列挙してある書物を中心に見ていきたい⁸⁾。

曰『算沙室稿』，曰『染香外集』，皆前刻。『詩古文詞』若干卷，元文所蒐輯者也。『説文

解字音均表注』尚蔵於家。別著『入仏問答』、『西婦見聞録』又若干卷。

『算沙室稿』と曰い、『染香外集』と曰い、皆以前刊行された。『詩古文詞』若干卷は元文が集めて編集したものである。『説文解字音均表注』はまだ家で保管している。別に『入仏問答』、『西婦見聞録』また若干巻を著わした。

ここで『江先生詩古文詞遺集』七巻の内容を見ると、次の通りである。

『染香齋詩録』二巻、『染香齋文集』二巻、『染香齋文外集』一卷・附補遺、『算沙室詞鈔』二巻。

朱綬の言う『算沙室稿』とは『算沙室詞鈔』のことであろうか。『説文解字音均表注』とは『説文解字音均表』に間違いなく、朱綬が叙を書いた1839年には出版されていなかった。後に『皇清經解統編』に収められたことについては白田2016・2019で記した。『入仏問答』は仏教関係の書物であり、江沅が仏教に帰依していたことを書物として示している。なお、江沅はこの書物では問橋居士という号を用いている。『西婦見聞録』は未詳。朱綬が挙げしていない書物としては『説文釈例』二巻があり、『説文解字説』（南京図書館蔵⁹⁾という手稿も残されている。

4. 江沅と親族

4.1 『清史稿』・『清史列伝』に見える江沅

清朝の人物であれば、まず『清史稿』・『清史列伝』を調べるのが普通であるが、本稿では上記の3.1から3.3に引用している資料、特に朱綬「江先生家伝」をもとにした。以下に、その理由を述べていきたい。

江沅は段玉裁の弟子、そして江声の孫と位置付けられることが多い。『清史稿』を見ると、江沅は江声・江鏐（江声の息子・江沅の父）の後に、その略歴がある（巻四百八十一、儒林二）。江沅の祖父にあたる江声は学者として名高く、『清史稿』でも江声について詳しく書かれている。江沅の伝記の部分では、段玉裁の委嘱を受け、江沅が『説文解字音均表』を著わしたことが記されている。ただ、それは江沅の生涯の一端で、仏教への帰依にも言及がなく、不十分な点は否めない。また、江沅「『説文解字音均表』弁言」（『皇清經解統編』本）からの引用が大部分で、それは「支、脂、之之為三」から「參之或然」までである。次の「当時面質玉裁，親許駁勘」も江沅『説文解字音均表』弁言に類似の文が見える（「当時面質，親許駁勘」）。

『清史列伝』（巻六十八、儒林伝下一）では江声のもとに江筠（江声の兄）、江鏐、江沅と続く。江沅の伝は『清史稿』と基本的に同じであるが、多少加筆した箇所もある。江沅の伝の後に顧広圻（字は千里、江蘇元和の人、1766-1835）の伝があるが、顧氏は江声の弟子の

一人である。『清史列伝』は『清史稿』より江声を取り巻く人物が二人増えている。

『清史稿』『清史列伝』とも江声、江鏐、江沅と続く家学をたどるには意義がある。ただ、江沅の伝記については語り尽くしていない。なお、江沅の父・江鏐については以下の4.2と4.3とで触れる。

4.2 江声・江鏐・江沅とその家学

江声・江鏐・江沅と続く家学は「4.1 『清史稿』・『清史列伝』に見える江沅」でも言及した。江藩『漢学師承記』（巻二）「江良庭先生」（江声）にも、江声の兄・江筠、江声の息子・江鏐と、江鏐の息子・江沅のことも短文ながら言及されている。鏐と沅については次のようにある。

子鏐、字貢庭、名諸生。孫沅、字鉄君、優貢生、世伝家学。

（江声の）息子は鏐、字は貢庭、諸生のうちにその名が知られていた¹⁰⁾。孫は沅、字は鉄君、優貢生で、世に家学を伝えた。

「世伝家学」は江声・江鏐・江沅と続く学問の系統を四文字で言い表す。江声は『尚書』に関する著作で名高いが、『六書説』という小学の著作もあり、それが江沅の『説文积例』・『説文解字音均表』に続いているのに違いない。吉田2014（87頁）によれば「江声には『説文解字考証』の専著があり、段玉裁の所説と多く符号していたという。」江声は『尚書』研究に専念しているが、その間の事情も含めて、江声の『尚書集注音疏述』と段玉裁『説文解字注』を比較対照した論文は吉田2014として公刊されている。

江声の兄・江筠は乾隆二十七年（1726）挙人であり¹¹⁾、著書に『読儀礼私記』二卷（抄本）がある。なお、江藩¹²⁾（字は子屏、江蘇甘泉の人1761-1831）は江声のみならず、江沅とも交流があった。それは漆永祥2006、「江声」（41-42頁）、「江沅」（73頁）に詳しい。

江声の父や兄弟については、孫星衍「江声伝」（『碑伝集』巻一百三十四、経学下之中）¹³⁾に「曾祖父は大浙、祖父は文懋、父は黔で、声を生み、凡て兄二人と弟一人がいた。」（「曾祖父大浙、祖父文懋、父黔、生声、凡有両兄一弟」）とあるが、兄の一人が江筠ということになる。母の姓名は記されていない。さらに、子供、孫、曾孫についても言及されているが、以下の通り男子のみである。

子鏐、呉県学生、亦好古、後声一年卒。孫沅・湘、沅県廩生。曾孫楨・檀。

息子は鏐、呉県の学生で、やはり古を好んだ。江声の逝去後一年でなくなった。孫は沅・湘で、沅は県の廩生であった。曾孫は楨・檀。

『清儒学案』（巻七十六）では「良庭学案」として江声の伝記等を挙げ、その後に「良庭家学」として江沅を示し、「良庭弟子」、「良庭交遊」と続き、最後に「子蘭弟子」（江沅の弟子）として雷浚を挙げる。江声の兄・江筠、江声の息子・江鏐については独立した項目を立

ていないが、家学という概念で江声一族を見ているのは評価できる。

4.3 江沅自身による親族に関する記述

江声・江鏐・江沅一族の家譜については、『中国家譜総目』（上海図書館・王2008, 641-651頁, 「江」の条）と日本の「全国漢籍データベース」¹⁴⁾をもとに、江氏家譜・宗譜と名の付く書物を何種類か閲覧したが、管見の及ぶ限り未詳である。上海図書館・王2008 (644頁)に見える「清代・蘇州・江氏」に相当する家譜二種も詳しく閲覧したが、江声・江鏐・江沅の一族とは異なっていた。その二種とは以下の通りである。

(清) 江振祚・(清) 江宗模修纂『濟陽家譜』一卷, 『統編』一卷, 抄本 (蘇州図書館蔵)。

(清) 江埭・江埭纂修『蕭江家乘』二卷, 抄本 (南京図書館蔵)。

ただし、幸いなことに江沅が親族について書いた文が『染香齋文集』下にある。父・江鏐については「先府君行略」で記し、上の妹を中心にして下の妹にも言及しているのは「亡長妹婦張門貞女述」であり、「先室戴孺人述」では江沅より先に亡くなった妻について書かれている。家譜・宗譜の類は男性中心で、夫人や娘の名前まではわからないので、江沅の書いた文は女性の親族まで分かるという点でも貴重である。

江沅「先府君行略」によると江鏐、字は貢庭、乾隆八年(1743)に生まれ、嘉慶五年(1800)五十八歳で逝去している。江声が亡くなったのは前年である。祖先については、「先世は徽州休寧の梅田村の出身で、明の万歴中に呉に遷り、府君で七世になる。」(「先世徽州休寧之梅田村, 明万歴中遷呉, 至府君七世矣。’)江鏐の妻は范氏で、二人の間に沅(長男)・湘(次男)という二人の息子和娘が二人いた。孫は男子が二人、女子が二人で、男子については楨・檀という名前も記されているが、江湘の息子和、女子は江沅の娘に違いない。江沅の娘二人について、名前はわからない。この娘たちについては後述する。

江鏐の著書は『蘇州府志』(卷一百三十六, 芸文一)に『補僧余事』という書物が見える。江鏐は阮元と交流があった。阮元「刻『七経孟子考文』並補遺序」(『擘経室一集』卷二)で校字を手伝った者の一人として「呉県友人江鏐」が挙げられている。その他、江鏐が阮元の幕友であったことは李金松2018 (75頁)「4. 江鏐, 字貢庭, 号補僧, 江声子, 江蘇呉県人。」に見える。

江沅の弟・江湘については、江沅「先府君行略」には「次湘」、つまり江鏐の次男が江湘であることが出ているのみである。江沅の二人の妹は江沅「亡長妹婦張門貞女述」によると名前も分かり、長妹は江玉で、次妹より五歳年上である。次妹は江淑で、姉妹の母は江沅と同じく范氏である。江玉が嫁ぐ前に張文藻が亡くなってしまったが、江玉は張家に嫁いだ貞女である。江玉は1819年四十七歳で他界した。それより早く次妹は1808年に亡くなっている。家譜の類の記述は男性中心であるので、江沅の文章は貴重である。さらに、張文藻、曹

福春については『蘇州府志』に伝記があるわけではなく、江沅が「亡長妹婦張門貞女述」に書いていることが逆に資料となる。『蘇州府志』に出ているのは、「張文藻聘妻江氏」¹⁵⁾(巻一百十六、列女四、呉県)である。

江沅の妻は江沅「先室戴孺人述」によると、姓は戴、名は瑛である。道光六年(1826)五十六歳で、江沅より先に亡くなっている。江沅の子供については朱綬「江先生家伝」によれば、江沅には息子はいなかった。江沅「懷旧詩三十五首」(『染香齋詩録』下)の一首に「王君惕甫」があり、その自注に「その長男は私の娘の婿である。」(「其長子予女婿也。»)という。王惕甫とは王芑孫である。このように、江沅の娘の一人は王芑孫の長男・王嘉祥に嫁いでいる。『莫釐王氏家譜』(巻八)には「嘉祥、輩行は一、字は善之、号は又樗。呉県の優貢生江沅の娘である。息子は二人で、敬修・慎修であるが、俱に成人に達しないうちに亡くなった。」(「嘉祥、行一、字善之、号又樗。娶呉県優貢江沅女。二子、敬修・慎修、俱幼殤。»)とある。もう一人の娘は朱綬「江先生家伝」によれば陳俊に嫁ぎ(本稿5.1参照)、陳俊は陳奐の堂弟にあたる。陳俊については『潁川陳氏支譜』(巻四上、世系)によって生没年(1797-1844)、字(允楨)、号(楞香)、略歴も分かる。江沅には息子がいなかったのであるが、跡継ぎの孫がいた。これについては本稿「5. 江沅の跡継ぎ」で改めて論じたい。

5. 江沅の跡継ぎ

江沅には息子がいなかったが、弟(江湘)の孫が跡継ぎになった。その跡継ぎは、朱綬によれば江元文、陳奐によれば江文煒である。江元文、江文煒とも江沅の弟の孫であることは確かである。上海図書館蔵『説文解字音均表』稿本には江文煒の跋があり、『説文解字音均表』のテキストについても、江沅の跡継ぎが関わってくるので、ここでも詳しく見ていきたい。

5.1 朱綬「江先生家伝」及び他の文献に見える江元文

まず、朱綬「江先生家伝」には次のようにある。

先生娶於戴，無子，以弟之孫元文為后。女二人王嘉祥及諸生陳俊其婿也。元文哀輯先生文集既成，而乞為文備家。

江沅先生は戴氏を娶ったが、息子はなかったので、弟の孫元文を跡継ぎとした。娘は二人で、王嘉祥と諸生陳俊はその婿である。元文は江沅先生の文集を編集してすでに完成し、序文を書くよう依頼して家に備えようとした。

朱綬の「江先生家伝」は1839年の日付で、江沅はその前年の1838年に亡くなっており、朱綬も1840年に死去する。1839年の時点では、江沅の跡継ぎは、江氏の弟(江湘)の孫で

あったに違いない。

朱綬「江先生家伝」という文献以外に、江元文自身が王芑孫輯『碑版文広例』に関与している。江沅に『碑版文広例』の文字を書き校正することを依頼したのは王壘（初名は仲壘、字は子兼、江蘇呉県の人、1786-1843）で、王氏は「『碑版文広例』叙」（道光二十一年、1841）で、「楷書を書き校正したのは江元文で、字は同甫である。」（「書楷校正者、江子元文、字同甫也。」）と言う。王壘は王芑孫の親戚であるが、『莫釐王氏家譜』を見てもそれほど近い血縁関係ではない。王壘は「『碑版文広例』叙」で王芑孫を「族兄惕甫先生」と呼び、文末に「族弟壘叙」と記す。江元文「『碑版広例』跋」の末尾には「辛丑冬至前三日後学江元文拜跋」とあり、執筆は1841年冬至の三日前であるが、貫籍は記されていない。その跋で王壘との関係が分かる箇所を引用するが、江元文は「文」と自称している。

洎道光丙申、先生哲嗣又樗姑丈命文録為卷帙、求以行世。（中略）以文世誼姻親、命為書文校字。

道光丙申（1836年）になると、（王芑孫）先生の跡継ぎである王嘉祥姑丈¹⁶⁾は私に書物を記録して世に問うようと命じた。（中略）私が（王嘉祥と）親戚関係にあるので、文字を書き校正することを命じたのである。

『碑版文広例』については睦駿2011（309-314頁）で取り上げられており、江元文の「『碑版広例』跋」も句読点付きで引用されている（311頁）。江元文の貫籍を「呉県」（「呉県江元文」、311頁）としている¹⁷⁾。

江元文は「『煮凌霄樹詩集』跋」も書いており、文末に「道光辛丑初夏受業江元文百 謹跋」とあり、1841年の文章と分かる。『煮凌霄樹詩集』は陳炯（字は月坨・寅甫、江蘇元和の人、1794-1840）の詩集である。陳奥『流翰仰瞻小伝』（第十四冊）によれば陳炯は「道光十二年壬申（1832）挙人」である。江元文は跋文の中で「文」と自称しているが、貫籍を記していない。

『煮凌霄樹詩集』六卷、吾師月坨先生之所作也。先生為先大夫入室弟子、經学小学俱有心伝。歳辛卯先大夫命受業於先生。文以貧、故未嘗具脩脯、先生所以教文者無不尽。越一年、先生挙於郷及赴礼闈、命文受業於執友陸稷民夫子。夫子所以教文者亦一如先生、是皆先生之賜也。（中略）先大夫与吾師先後謝世。

『煮凌霄樹詩集』六卷は吾が師月坨先生（陳炯）が著わしたものである。先生は先大夫（江沅）の入室の弟子であり、經学小学ともに伝授された。辛卯（1831）先大夫が月坨先生から教えを受けるようにと命じた。私は貧しく、先生への月謝もこれまでなかったが、私に教えうることは何でも教えてくださった。一年経つと、先生は科挙の郷試を受けて会試にも赴き、父の友人・陸稷民（陸元綸）夫子に教えを受けるようにと私に命じた。陸夫子が私に教えてくださることも陳先生と全く同じで、すべて先生のおかげであ

る。(中略) 先大夫と吾が師陳先生は前後して逝去した。

陳炯は陳奐、陳峻といとこである。陳浩には四人の息子がいて¹⁸⁾、その息子とは陳槐(長男)、陳植(次男)、陳朴(三男)、陳格(四男)である。陳奐は陳植の次男、陳炯は陳朴の次男、陳峻は陳格の次男である(陳峻の妻は江沅の娘)。江元文の跋によれば、陳炯は江沅の入室の弟子である。江元文は江沅から陳炯に教えるようにと命じられたというので、江沅は元文に期待していたに違いない¹⁹⁾。江元文によると陸元綸(字は稷民、江蘇長洲の人、1801-1859)²⁰⁾は父の友人ということだが、父の字まで記していない。なお、江沅は陳炯の父・陳朴とも交流があった(柳向春2010, 82-83頁参照)。

5.2 陳奐『師友淵源記』と許祥『狷叟詩録』他に見える江文煒

次に、江沅の跡継ぎには江文煒もいたことについて述べる。陳奐『師友淵源記』江沅の条には「(江沅の) 嗣孫の文煒、字は彤甫、庠生。」(「嗣孫文煒、字彤甫、庠生。»)とあり、嗣孫は跡継ぎの子孫である。陳氏は『師友淵源記』の末尾で「この淵源記は乙卯の年に述作した。」(「是記作於乙卯歲。»)と言う。乙卯は1855年にあたり、1839年の日付となっている朱綬「江先生家伝」から十六年経っている。

また、陳奐は1786年生まれだが、五十五歳もの年の差がある許濬祥(初名は誦禾、字は子頌、浙江海寧の人、1841-1923)も、江文煒を江沅の孫とする。「金匱江彤甫明経師文煒」(『狷叟詩録』)という七言絶句の自注で次のように言い、江文煒の没年が分かる。

師為良庭先生元孫、鉄君先生孫。治『説文』、工小篆、著書未写定、病没。時咸豊己未十月也。配自縊以殉²¹⁾。

先生は良庭(江声)先生の子孫、鉄君(江沅)先生の孫である。『説文』を修め、小篆に巧みであったが、著書が書き終わらないうちに、病気で亡くなった。それは咸豊己未(1859)年十月の事であった。つれあいは自ら首をくくって夫の後を追った。

江文煒は『説文解字音均表』稿本(上海図書館蔵)の末尾に「『説文解字音均表』跋」²²⁾を記すが、年は道光二十九年(1849)で、江沅は1838年に亡くなっているので十年経ったことになる。日付の次に「金匱江文煒識」とあるので、江文煒の貫籍は金匱である。この跋文に「文煒之齒已三十有六」とあるので、江文煒は1813年生まれと推定でき、1859年に四十六歳で亡くなったと言える。

江文煒は「『説文解字音均表』跋」で、江沅の文集について次のように言う。

戊戌冬、先大夫帰道山、文煒搜羅詩古文詞募刊之資不足、鬻書竣事。

戊戌(1838)の冬、先大夫(江沅)は逝去し、私文煒は詩・古文・詞を収集し、刊行のため募ったが、資金が足りず、本を売って刊行を果たした。

朱綬「江先生家伝」では「元文が先生の文集を哀輯してすでに完成した。」(「元文哀輯先

生文集既成。)と書かれていて、江元文が文集の編集に携わったことが分かる。朱氏の文が書かれたのは1839年で、その頃江元文と江文煒とも、江沅の文集に関与していたことに間違いない。江文煒が『説文解字音均表』稿本を所持し、「『説文解字音均表』跋」も書いている。陳奐も『師友淵源記』で、江文煒を江沅の跡継ぎと記しているのである。江沅が亡くなった後、跡継ぎは江元文であったが、江文煒もそれに準じる立場にあったのではないか。

以上の資料の他、江声『論語埃質』や『六書説』が『琳琅秘室叢書』に収録されるにあたり、江文煒がその校書を行っていることは重要である。『論語埃質』の巻下末には「呉門江氏家藏本 元孫 文煒 謹校」とあり、底本が「江氏家藏本」であることが分かる。江文煒とともに校録に当たったのは仁和の胡珽²³⁾、元和の徐立方²⁴⁾、呉県の程松齡である。『六書説』の末尾には「元孫 文煒 謹校録」とある。胡珽「『琳琅秘室叢書』目録」によれば、『六書説』も「呉門江氏家藏」である。

ここで江文煒の貫籍の金匱について言及しておく。金匱は現在の無錫にあたる。無錫市地方志編纂委員会1995(1頁)に「清雍正二年(1724年)、無錫県を無錫と金匱の両県に分け、民国元年(1912年)両県が合併し、再び無錫県と称した。」(「清雍正二年(1724年)、分无錫县为无錫、金匱两县。民国元年(1912年)两县合并为一,复成无錫县。»)とある。ただし、江文煒の著書については蘇州府・呉県の箇所に列挙されていて、『蘇州府志』(巻百三十六、芸文、呉県)に「江文煒『石鼓文考』『芳草堂詩集』字彤甫、沅孫、金匱諸生。」とある。『石鼓文考』と『芳草堂詩集』²⁵⁾については書名以上のことは待考であるが、「字は彤甫、(江)沅の孫、金匱の諸生。」は双行の注である。

江文煒の学問上の仕事としては、古籍に対する校正や書入れも残っている。宋・文彦博『文潞公文集』に咸豊三年(1853)江文煒跋がある。その書影は国立中央図書館特蔵部1982(2134-2135頁)で見ることができる。また、郭懿行(字は恂九、山東棲霞の人、1757-1825)『爾雅義疏』末尾の胡珽による跋文(1856)には、江文煒が校正に最も尽くしたことが見える。さらに李塗『文章精義』一卷(清抄本、北京大学図書館蔵)の末尾に「漢陽葉名澧潤臣²⁶⁾敦夙好齋蔵書 元和 徐立方 仁和 胡珽 金匱 江文煒 同校」とある。

また、陳奐が張歩瀛と呉門(蘇州)の江文煒の家で会ったことが陳奐「張廉舟伝 辛酉(1861)」(『三百堂文集』下)に見えるので(「君再見呉門江茂才文煒家。»),無錫にずっと住んでいたとも限らないであろう。因みに張歩瀛は1857年に亡くなり、1861年に陳奐は「張廉舟伝」を書いている。陳奐『流翰仰瞻小伝』(第十冊)には「江文煒秀才、字は彤甫。鉄君(江沅)師の嗣孫。金匱の学校に入学した。」(「江秀才 文煒、字彤甫。鉄君師嗣孫。入金匱学。»)とある。想像の域を出ないが、江文煒は呉県の出身ではあるものの、科挙のため金匱で学んだのかもしれない。念のため『無錫金匱県志』も調べてみたが、江文煒の名は見当たらなかった。なお、現代の『江蘇芸文志』(南京師範大学古文献整理研究所1995、

1996)でも江文煒は『蘇州卷』(1334頁)と『無錫卷』(849頁)の両方に見える。

5.3 江元文と江文煒

江湘には息子が二人いて、楨・檀という名前まで分かっている。ただ、江元文と江文煒の父親の名前は分からないので、この二人が父が同じ兄弟なのか、父は別々でいとこなのかは不明である。ただ、江沅の弟の孫であるからには、二人とも輩行は同じはずである。江元文・江文煒とも名前に「文」の字を含むが、名前の「文」の字が上に来るか、下に来るかが異なっている。江元文は「文」と自称していて、そうなると「元」は「はじめ」という意味で、同世代で一番に生まれたのかもしれない。貫籍・字をまとめると、字は「甫」の字が二人とも下に来ている。

江元文 貫籍は呉県，字は同甫 江文煒 貫籍は金匱，字は彤甫

江元文と江文煒については資料が少ないので断定はできないが、輩行が同じでも、名前の上からはそれがはっきりしないのかもしれない。

6. おわりに

本稿では江沅の伝記として朱綬「江先生家伝」を中心にして、関連資料も用いてきた。江沅は一般的に段玉裁の弟子とみなされるが、張舜徽のように段氏の諍友とする考えもある。江沅は祖父江声、江声の兄江筠、父江鏐と続く家学の担い手でもあり、『説文』を紐解き、段玉裁に託されて『説文解字音均表』を編纂する。江沅は彭紹升を師と仰ぎ、晩年は仏門に入った。江沅一族の家譜は不明であるが、江沅自ら父母・弟や妹、妻と娘について文章を書いている。江沅には息子がいなかったので、弟の孫が跡継ぎになったというが、その点について本稿ではかなりの分量を割いた。江氏一族の家譜がないので、別の資料を調べる限り、江元文と江文煒の二人が跡継ぎに当たるのは事実である。『説文解字音均表』稿本が上海図書館にあり、それには江文煒の跋が記されている。本稿では江文煒が江沅の跡継ぎであるという点を確認したので、今後の『説文解字音均表』研究に活用していきたい。

注

- 1) 江沅の祖父・江声と段玉裁との交流については林慶勲1979(46-47頁)にも言及がある。
- 2) 江沅の生没年については白田2002, 注2で言及したことがある。
- 3) 『蘇州府志』(巻八十九, 人物十六, 長洲県)の顧元熙伝は卒年を「四十一」とする。これは『道光志』, つまり『道光 蘇州府志』を踏襲している。
- 4) 梁啓超・小野和子1974(315頁)に「清末思想界の底流にあったのが、仏教学である。(中略)

- 乾隆時代になると、彭紹升、羅有高が仏教をあつく信仰した。」とある。
- 5) 長洲の彭氏一族については朱焱煒2008(160-191頁)「第六章 清代蘇州狀元彭啓豊」に詳しい。
 - 6) 王芑孫の三人の息子、嘉祥・嘉福・嘉録については、睦駿2011(13-17頁)参照。
 - 7) 陳奐『師友淵源記』江沅の条には「江諱沅，字子蘭，一字鉄君。吳興優貢。精篆楷，工帖括。(中略)子蘭師悅禪学，通釈典，茹素祝髮，而卒於家。寿七十有二。著『説文解字音均表注』十七篇蔵嗣孫文煒，字彤甫，庠生。」とある。
 - 8) 『蘇州府志』(卷一百三十六，芸文志一)に「江沅『説文解字音均表注』十七卷。『説文釈例』二卷。『江先生文集』四卷。『染香庵詞鈔』一卷。」とあり，双行の注に「又有『入仏問答』『西婦見聞録』，皆係梵語，不著録。」と見える。
 - 9) 江沅『説文解字説』については，「漢語史研究的材料・方法与学術史観」研討会(南京大学漢語史研究所，2016年6月)で口頭発表済みで，タイトルは「江沅『説文解字音均表』卷首与南京図書館蔵江沅『説文解字説』」であり，論文の公刊も決定している。
 - 10) 近藤2001(337頁)は「名諸生」を「諸生のうちにその名が知られていた。」と訳しておられ，それに従う。中国語による注釈は漆2013(248-249頁)参照。
 - 11) 南京師範大学古文献整理研究所1996(993頁)の江筠の条。
 - 12) 江藩の卒年は一般的に1831年であるが，漆永祥氏は1830年とする。漆2006(495-496頁)参照。また，江藩の貫籍については漆2006，8-10頁参照。
 - 13) 吉田純2014(85-86頁)に孫星衍「江声伝」について部分訳がある。
 - 14) アドレスは <http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/kanseki/> (2020年9月現在)
 - 15) 双行の注に「拋『長元節孝祠志』増俱道光元年旌」とある。
 - 16) 「姑丈」は本来父の姉妹の夫を指す。江元文の父は江楨か江檀で，楨・檀とも江沅の娘とは「いとこ」となる。江沅の娘の一人が王嘉祥に嫁いでいる。そこで，「王嘉祥姑丈」の「姑丈」とは，父のいとこの夫を指すと考えられる。
 - 17) 江元文は李放『皇清書史』(卷二，「江」)にも見え，それによれば貫籍は吳興である。
 - 18) 『潁川陳氏支譜』卷四上には陳浩(二世に当たる)の略伝がなく，浩の長男の槐(三世に当たる)の略伝から始まる。また，煩瑣を避けるため，息子たちの字や生没年等は省略する。陳氏一族には『潁川陳氏支譜』があり，略伝，家系図等が記されている。
 - 19) 簡凱廷2017(245-248頁)によれば，御生氏明善・榮修慧善『成唯識論隨疏』という仏教の書物について，その刊行に龔自珍と江沅が関与し，江沅の命により，江元文は校正を行って「成唯識論隨疏題後」(道光二十一年，1841)も書いたという。
 - 20) 『蘇州府志』(卷八十九，人物十六，長洲縣)，陳奐『師友淵源記』等に略伝がある。
 - 21) 『皇清書史』(卷二，「江」)に「江文煒，字彤甫，沅孫，金匱籍，貢生。咸豊九年殉難。治説文，工小篆。」とあり，出典は許淮祥『狷叟詩録』となっているが，本稿でも見たように，江文煒は病気で亡くなり，妻が後を追ったのである。
 - 22) 江文煒の跋文は陳先行・郭立暄2017(82頁)に句読点付きで掲載されている。
 - 23) 胡珽の字は心耘，浙江仁和人，1822-1861。
 - 24) 徐立方は『蘇州府志』に伝記はないが，卷六十三(選挙五，咸豊元年<1851>)に「徐立方稼甫」と見え，その上に「元和 陳奐 有伝」とある。

- 25) 芳草堂は王芑孫の堂号で、陸駿2011(24頁)に「芑孫蘇州葑門老宅内之堂号」とある。また、王芑孫撰・清魏茂林箋『芳草堂合課詩鈔箋略』二巻については陸駿2011(298頁)に説明がある。
- 26) 葉名禮の字は潤臣、湖北漢陽の人、1811-1859。

参考文献

〈日本語文献〉著者五十音順

- 白田真佐子2016.「江沅『説文解字音均表』の成書と刊行」,『文学論叢』(愛知大学人文社会学研究所),第153輯,23-35頁。
- 白田真佐子2019.「江沅『説文解字音均表』の統経解本と清稿本における諧声符の配列—蘇州図書館蔵本を新たな資料として—」,『言語と文化』(愛知大学語学教育研究室),第41号,51-68頁。
- 近藤光男(訳注)2011.『国朝漢学師承記』,明治書院。
- 坂内千里2014.『経部引用書から見た「説文解字繫伝」注釈考』,大阪大学出版会。
- 吉田純2014.「『尚書集注音疏』と『説文解字注』の符合举例」,『名古屋大学文学部研究論集』(哲学)60,85-100頁。
- 頼惟勤・説文会1983.『説文入門』,大修館書店。
- 梁啓超(著)・小野和子(訳注)1974/2003.『清代學術概論 中国のルネッサンス』,『ワイド版東洋文庫』245,平凡社。

〈中国語文献〉著者中国語拼音順

- 陳鴻森2012.「『清史列伝・儒林伝』続考」,『中国典籍与文化』,No.1(総第80期),73-85頁。
- 陳先行・郭立暄(編著)2017.『上海図書館善本題跋輯録 附版本考』,上海辞書出版社。
- 国立中央図書館特蔵部(編)1982.『国立中央図書館善本題跋真跡』,台北・国立中央図書館。
- 簡凱廷2017.「被忘却の伝統—明末清初『成唯識論』相関珍稀注釈書考論」,『漢学研究』,第35巻1期,225-260頁。
- 姜亮夫(纂定)・陶秋英(校)1961/1985.『歴代人物年里碑伝綜表』,台北・文史哲出版社。
- 白田真佐子2002.「論江沅『説文解字音均表』第4部最後部分的諧声符」,『文学論叢』(愛知大学文学会),第125輯,257-266頁。
- 李金松2018.「『清代士人游幕表』補遺」,『天中学刊』,第33巻第5期,74-76頁。
- 林慶勳1979.『段玉裁之生平及其學術成就』,台北・中国文化学院中国文学研究所博士論文。
- 柳向春2010.『陳奐交游研究』,華東師範大学出版社。
- 南京師範大学古文獻整理研究所(編著)1995.『江蘇芸文志 無錫卷』,江蘇人民出版社。
- 南京師範大学古文獻整理研究所(編著)1996.『江蘇芸文志 蘇州卷』,江蘇人民出版社。
- 漆永祥2006.『江藩与「漢学師承記」研究』,上海古籍出版社。
- 上海図書館(編),王鶴鳴(主編)2008.『中国家譜総目』,上海古籍出版社。
- 陸駿2010.『王芑孫年譜』,華東師範大学出版社。
- 2011.『王芑孫研究』,華東師範大学出版社。
- 王華宝2016.『段玉裁年譜長編』,江蘇人民出版社。

無錫市地方志編纂委員会1995.『無錫市志』, 江蘇人民出版社。

徐世昌1938/2009.『清儒学案』, 台北・世界書局。

張舜徽1963/2004.『清人文集別録』, 華中師範大学出版社。

朱焱煒2008.『明清蘇州状元与文学』, 中国言実出版社。

〈引用書目〉著者中国語発音順

編者不詳・王鍾翰(点校).『清史列伝』, 中華書局, 1987年。

陳炯.『煮凌霄榭詩集』六卷,『南開大学図書館蔵稀見清人別集叢刊』19所収本, 広西師範大学出版社, 2010年。

陳奂.『師友淵源記』一卷,『邃雅齋叢書』(『叢書集成續編』十一)所収本, 台北・芸文印書館, 1970年。

陳奂(輯)・吳格(整理).『流翰仰瞻 陳碩甫友朋書札』, 上海古籍出版社, 2012年。

陳奂.『流翰仰瞻小伝』, 陳奂(輯)・吳格(整理)『流翰仰瞻 陳碩甫友朋書札』所収本(上海古籍出版社, 2012年)。

陳奂.『三百堂文集』,『乙亥叢編』所収本, 台北・世界書局, 1976年。

陳寿・陳履晋等(修).『穎川陳氏支譜』二十卷, 光緒二十六年(1900)鉛印本,『中華族譜集成 陳氏譜卷』第六冊所収本, 巴蜀書社, 1995年。

段玉裁『說文解字注』三十卷『六書音均表』五卷, 經韻樓本(上海古籍出版社, 1981年影印)。台湾・国家図書館蔵經韻樓本(江沅手校)。

段玉裁(撰)・鍾敬華(校点).『經韻樓集』附補篇年譜, 上海古籍出版社, 2008年。

龔自珍.『龔自珍全集』, 上海人民出版社, 1975年。

郝懿行.『爾雅義疏』二十卷, 北京市中国書店, 1982年。

江藩.『漢学師承記』(外二種), 三聯書店, 1998年。

江藩(纂)・漆永祥(箋釈).『漢学師承記箋釈』, 上海古籍出版社, 2013年。

江筠.『誦儀札私記』二卷, 抄本(南京図書館蔵)。

江声.『論語埃質』三卷,『琳琅秘室叢書』(『百部叢書集成』)所収本, 台北・芸文印書館, 1967年。

——.『六書說』一卷,『琳琅秘室叢書』(『百部叢書集成』)所収本, 台北・芸文印書館, 1967年。

江埭・江琛(纂修).『蕭江家乘』二卷, 抄本(南京図書館蔵)。

江沅.『說文積例』二卷,『小学類編』所収本, 台北・華文書局, 1970年。

——.『說文解字音均表』十七卷,『皇清經解統編』所収本, 芸文印書館, 1965年。

——.『說文解字音均表』二卷(江文煒跋), 稿本(上海図書館蔵)。『統修四庫全書』247所収本, 上海古籍出版社, 2002年。

——.『江先生詩古文詞遺集』七卷,『清代詩文集彙編』484所収本, 上海古籍出版社, 2010年。

——.『入仏問答』二卷, 民国三年(1914)揚州蔵經院刻本(北京大学図書館蔵)。

江沅〈問橋居士〉(原本)・太虚法師(編次).『入仏問答類編』, 民国十四年(1925)石印本(北京大学図書館蔵・国家図書館蔵)。

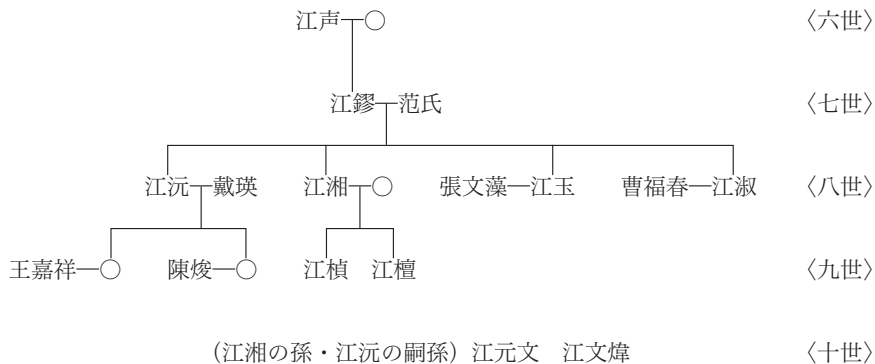
江振祚・江宗模(修纂).『濟陽家譜』一卷,『統編』一卷, 抄本(蘇州図書館蔵)。

李銘皖等(修)・馮桂芬等(纂).『蘇州府志』一百五十卷・図一卷, 首三卷, 光緒八年(1882)江蘇書局刊本。

- 李塗. 『文章精義』一卷, 抄本 (北京大学図書館蔵)。
 閔爾昌 (録). 『碑伝集補』六十卷, 『清代碑伝全集』所収本, 上海古籍出版社, 1997年。
 裴大中等 (修)・秦細業等 (纂). 『無錫金匱県志』四十卷, 首一卷, 附『殉難紳民表』二卷, 『列女
 姓氏録』四卷, 光緒七年 (1881) 刊本 (東洋文庫蔵)。
 錢儀吉. 『碑伝集』一百六十卷, 首二卷, 末一卷, 『清代碑伝全集』所収本, 上海古籍出版社, 1997
 年。
 阮元. 『學經室集』, 『国学基本叢書』所収本, 台湾商務印書館, 1967年。
 王季烈. 『莫釐王氏家譜』二十四卷, 民国二十七年 (1938), 上海・石印本。
 王芑孫 (輯). 『碑版文広例』十卷, 『行素草堂金石叢書』所収本。
 王芑孫 (撰)・魏茂林 (箋). 『芳草堂合課詩鈔箋略』二卷, 『二家詩鈔箋略』所収本, 咸豐五年
 (1855) 孫紹仁刊本 (東洋文庫蔵)。
 許淮祥. 『狷叟詩録』一卷, 光緒三十二年 (1906) 刻本 (上海図書館蔵)。
 ——. 『狷叟詩録』一卷, 『晚清四部叢刊』第六編所収本, 台中・文叢閣圖書有限公司, 2011年。
 趙爾巽等 (撰). 『清史稿』, 中華書局, 1977年。
 朱綬. 『知止堂詩録』十二卷, 『知止堂詞録』三卷, 『知止堂文集』八卷, 『補遺』一卷, 『清代詩文
 集補遺』563所収本, 上海古籍出版社, 2010年。

【付】 江氏一族

○は名前不詳の女子



(注) 江声の父は黔, 声の兄は二人, 弟は一人で, 兄の一人が筠。江鏐の兄弟は不明。